テヘラン・サルタナティー圖書館所藏の『バーブル著作集』について

閒　野　英　二

はじめに
1　寫本の概要
(1)　寫本番號　(2)　寫本名　(3)　體裁
(4)　構成　(5)　來歴　(6)　寫本作成年代
2　『ムバイイン』
3　『アルーズ・リサーラス（韻律論）』
4　『504のリズム』
5　『バーブル・ナーマ』
6　『ワーリディーヤ・リサーラス』
結　び

はじめに

本稿の目的は，イランの首都テヘランのゴレスターン宮殿 Kākh-i Gulistān 内にあるサルタナティー圖書館（帝室圖書館） Kitābkhāna-yi Salṭanatī[1] に所藏される『バーブル著作集』とでも呼ぶべき[2]貴重な一寫本についての檢討結果を，取り急ぎ，學界に報告することにある。

『バーブル著作集』のバーブルとは，いうまでもなく，15世紀後半の中央アジアにティムール朝の王子として生まれ，16世紀前半のインドにムガル朝を開設したザヒールッ・ディーン・ムハンマド・バーブル（1483-1530）を指す。

このバーブル關係の寫本がテヘランに存在することと寫本の大凡の內容は，

(1)　普通サルタナティー圖書館として知られるこの圖書館は，現在はゴレスターン宮殿寫本圖書館 Kitābkhāna-yi khaṭṭī-yi Kākh-i Gulistān と呼ばれているようであるが，混亂を避けて通稱に從う。

(2)　サルタナティー圖書館では，後述するように，『バーブルのワカーイー』という名で呼ばれている。しかし寫本の內容から見て，『バーブル著作集』と呼ぶのが適切と考えられる。以下，本稿ではこの寫本を『バーブル著作集』と呼ぶことにする。

既にかなり以前から學界に知られていた。まず，1957年，トルコのトガン Z. V. Togan が，テヘランの諸圖書館に所藏されるインド將來のチャガタイ語寫本等についての調査報告(3)の中で，この寫本について初めて短く言及した。次いで1977年，イランのアーターバーイ B. Ātābāy が『サルタナティー圖書館藏，歴史・旅行記・日記・地理關係寫本目錄』(4) の中でこの寫本について4ページにわたって記述した。

しかし，この2つの報告から知られていたのは單にこの寫本の概略にしか過ぎず，その上，これらの報告には重大な誤りすら含まれていた。また，この寫本が舊イラン王室所藏の貴重本であるため，そしてさらにイランがイラン・イスラーム革命という激動の時代を經驗したため，從來この寫本を直接に調査する機會に惠まれた研究者の數は極度に少なかった(5)。

その結果，この寫本については，學界で種々の憶測すらも流布していた(6)。中でも最も興味をひかれる憶測は，ロシア科學アカデミー東洋學研究所サンクト・ペテルブルク支部のスルターノフ T. I. Sultanov によるものであった。

(3) この報告は，1957年1月1日，ラーホールで開催されたパキスタン東洋學者會議で英語で發表され，その英文原稿が，Z. V. Togan, "Chaghatay Linguistic and Timurid Artistic Remains in the Moghul-Time Works Preserved in the Teheran Libraries," *Oriental College Magazine*, 34-2・3, 1958 として公表されており，またこの英文のトルコ語譯が Z. V. Togan, "Tahran kütüphanelerinde Hindistan'dan gelen eserlerde Çagatay dil ve Temürlü sanat âbideleri," *Belleten*, cilt: 24 Sayı: 95, 1960 として公刊されている。

(4) Badrī Ātābāy, *Fihrist-i tārīkh—safar nāma—siyāḥat nāma—rūz nāma va jughrāfiyā-yi Kitābkhāna-yi Salṭanatī*, 2535/1397 (1977), Tehrān, pp. 460-463。この目錄は，當初，羽田亨一氏の盡力でテヘランからコピーを取りよせ參照することが出來た。記して謝意を表したい。

(5) 筆者の知る限りでは，トガン以後，イラン人以外で確實にこの寫本を見たと思われる研究者はフランスのトルコ學者バケ・グラモン J.-L. Bacqué-Grammont である。しかし，バケ・グラモンが見たと思われるのは30年以上も前のことである。このためか，バケ・グラモンも筆者の質問に対し，この寫本については明確な回答をすることが出來なかった。さらに，最近，バーブルの詩集に關する研究を出したトルコのユジェルも，その希望にもかかわらず，この寫本のコピーを得ることができなかったと記している (Bilâl Yücel, *Bâbür Dîvânı* (*Gramer-Metin-Sözlük-Tıpkıbasım*), Ankara, 1995, pp. 25-26)。このユジェルの研究については菅原睦氏による書評が出された (『東洋學報』79—3，1997)。なお，本文ですぐ後に記すように，久保一之氏が最近この寫本を實際に手に取って見ることが出來た。氏によれば，美麗な，狀態のよい寫本であるという。

(6) 寫本が水をかぶって狀態が極めて惡く，閲覽は不可能だろうという，根據不明の上に全く誤った情報を國際學會の席で筆者に告げたロシアの高名な研究者もあった。

スルターノフは，先のアーターバーイの寫本目錄の記述を利用して，この寫本に含まれるバーブルの回想錄『バーブル・ナーマ』がバーブルの生存中に作成された貴重この上ない寫本ではないかという大膽ともいうべき見解を，彼の論文や書評(7)の中で繰り返し述べている。これは，もしそのような寫本が現實に存在すれば，これまでの學界の常識（バーブル生存中に作成された『バーブル・ナーマ』の寫本など，今日まで殘されているはずがないという常識）が完全に覆される見解であった。

筆者は1995年，4種のチャガタイ語テキストを利用して，『バーブル・ナーマ』のアラビア文字による校訂本を刊行した(8)。この校訂本は幸い學界で歡迎され，これまでにバーブルの故鄕ウズベキスタンをはじめ，ロシア，アメリカ，それに日本で好意的な書評が出されている(9)。しかし，筆者が校訂に當たって利用できなかったサルタナティー圖書館藏の『バーブル・ナーマ』が，もしスルターノフの推定するようにバーブル生存中の寫本であるとすれば，校訂に當たって，當然まず第1に利用されねばならなかった。この寫本は，はたしてそれほどに貴重な，優れた寫本であるのか否か。

---

(7) Турсун И. Султанов, "О прижизненном автору списке «Записок» Бабура," *Письменные памятники и проблемы истории культуры народов Востока. XVII годичная научная сессия ЛО ИВ АН СССР (доклады и сообщения)*. Часть 1, Москва, 1985; тоже, "Обстоятельства и время написания "Бабур-наме"," *Тюркские и монгольские письменные памятники. Текстологические и культуроведческие аспекты исследования*, Москва, 1992; тоже, "*Zahīr ad-Dīn Muḥammad Bābur, Bābur-nāma (Vaqāyi'). Critical Edition based on Four Chaghatay Texts with Introduction and Notes* by Eiji Mano, Kyoto Shokado, 1995", *Восток 1996 №. 5* (Москва, 1996)〔英語版 T. Sultanov, *Manuscripta Orientalia*, 2-1 (St. Petersburg-Helsinki, 1996)〕。

(8) 間野英二『バーブル・ナーマの研究 I 校訂本』，京都，松香堂，1995年。以下，これを校訂本と呼ぶ。

(9) Т. И. Султанов, *Восток 1996 №. 5* (Москва, 1996)〔英語版 T. Sultanov, *Manuscripta Orientalia*, 2-1 (St. Petersburg-Helsinki, 1996)〕; Абдурашид Абдуғафуров ва Асомиддин Уринбоев, *Узбекистон Адабиёти ва Санъати*, 15 март 1996 (Ташкент)〔邦譯，A. アブドゥガフーロフ・A. オリンバーエフ（久保一之譯）『西南アジア研究』45，1996〕; Абдурашид Абдуғафуров, *Узбекистон Адабиёти ва Санъати*, 24 январ 1997 (Ташкент); R. Dankoff, *Journal of American Oriental Society*, 117-4, 1997；菅原睦，『東洋史研究』56-1，1997。

このような事情もあって，筆者は，かねてからこの寫本を檢討したいと考えていた。その機會はすぐには訪れなかったが，幸いにも，きわめて最近，すなわち今年（1998年）の1月，文部省在外研究員としてイランに滯在した久保一之氏の盡力により，筆者の校訂本と交換するという形で，この寫本全體[10]のコピーを入手することができた。筆者の希望をかなえてくれた久保氏と貴重な寫本のコピーを惠與されたサルタナティー圖書館に對し心からなる謝意を表したい。

さっそく寫本のコピーを檢討してみたところ，この寫本については，ただちに學界に報告すべきいくつかの新事實を發見したので，ここに，その概要を報告することにする。ただ，この寫本は1000ページを越える大部なものであるため，筆者による檢討はなお萬全とは云い難い。このため，この報告は「簡報」とでも稱すべき性質のものであることを，あらかじめお斷りしておきたい。

1 寫本の概要

アーターバーイの寫本目錄に見える記述と今回入手した寫本のコピーを利用して，この寫本の概要を述べたい。なお先にもふれたスルターノフがその論文の中で[11]，またトルコのユジェル B. Yücel がバーブルの『詩集』に關する研究書の中で[12]，既にこの寫本の概要を紹介している。しかしスルターノフとユジェルの記述は，いずれもアーターバーイのペルシア語による記述をロシア語とトルコ語で紹介したものにすぎない。このため，ここにアーターバーイが述べなかった諸事實をも加えつつ，まず寫本の概要を紹介したい。

(1) 寫本番號

トガンはサルタナティー圖書館に於ける寫本番號を671と記した。しかしこの寫本の表紙裏に押されたイラン帝室圖書館 Kitābkhāna-yi davlat-i ʻalīya-

(10) この寫本の一部のみを收めたマイクロフィルムはテヘラン大學圖書館に所藏されている。

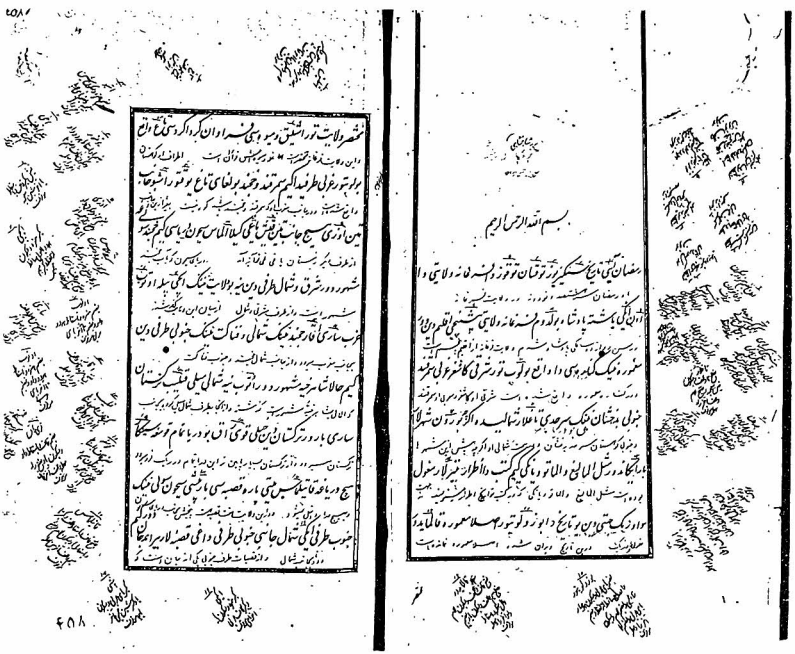
(11) Турсун И. Султанов, "Обстоятельства и время написания "Бабур-наме"" (前掲), стр. 91-93.

(12) Bilâl Yücel, *Bâbür Dîvânı* (前掲), pp. 25-26。

yi Īrān の藏書印では2936とあり，また，イラン革命後，所管が國家文化遺產廳 Sāzimān-i mīrāth-i farhangī-yi kishvar に移った現在では，2249という新しい番號が付せられて，表紙にもそのように記されている。

(2) 寫 本 名

イラン帝室圖書館時代以降，現在に至るまで，Vaqāyi'-i Bāburī (『バーブルのワカーイー』) が使用されている。ここに見える『ワカーイー』は『出來事，出來事の記錄』の意味であり，これが，現在，一般に『バーブル・ナーマ』すなわち『バーブルの書』と呼ばれているバーブルの回想錄の本來の名稱である(13)。すなわちこの寫本全體が，バーブルの最も著名な作品の名で，いわば代表して



サルタナティー本　457～458ページ　『バーブル・ナーマ』冒頭

呼ばれていることになる。なお，アーターバーイの寫本目錄には，Tārīkh-i

(13) 校訂本，xxv-xxvi ページを見よ。

vaqāyi'-i Bāburī (Bābur-nāma) yā (Tūzūk-i Bāburī) すなわち『バーブルの出來事の歴史（バーブル・ナーマないしトゥーズーキ・バーブリー）』と記されている。この中の『トゥーズーキ・バーブリー』は，インドでよく使われるバーブルの回想錄の別稱である。

(3) 體　　裁

横24センチ，縱41センチ。かなり大型の寫本。紙は，寫本表紙に見える記述によればダウラターバード紙[14]とブハーラー紙。書體はしっかりとした明瞭なナスタリーク體。ミニアチュールはない。

全體で1036ページ，518葉。偶數ページの左下に偶數のページ番號がアラビア文字で捺されている。奇數ページにはページ番號は捺されていない。

各ページは18行。第1行，第3行などから第9行に至る奇數行にチャガタイ語の原文が黑い文字で書かれ，チャガタイ語の文章の下，すなわち第2行，第4行などから第18行に至る偶數行（チャガタイ語とチャガタイ語の行間）に赤いやや小さな文字でペルシア語の對譯が記されている。ただし，187～189ページ，304～306ページのごとく，奇數行に記された本文そのものがペルシア語である場合は，勿論，ペルシア語による對譯は省略され，その下の行は空白のまま殘されている。

この寫本に含まれる『ムバイイン』全體と『バーブル・ナーマ』の冒頭の一部については，文中に現れるチャガタイ語の發音が欄外や行間にきわめて小さい文字で注記されている[15]。本來はこの寫本に收められた全ての作品の，全てのチャガタイ語についてその發音を注記するつもりであったと思われる。しかしその作業があまりに煩瑣であるため，途中でやめてしまったという感じであ

(14) ダウラターバード Davlatābād はインドの中西部，デカン高原の都市で，製紙業の中心地として知られる（EI, new ed., vol. 2, 1965, p. 18）。なお，アーターバーイはサマルカンド紙とする。しかしこの寫本はインドで作成されたと思われるから，おそらく表紙の記載の方が正しい。寫本に實際に觸れた久保一之氏もサマルカンド紙とはやや異なる印象を受けたという。

(15) 例えば，『バーブル・ナーマ』の最初のページでは，آی というチャガタイ語の發音が，欄外に ba-madd ba-hamza va ba-dū yā avval kusūr va thānī mavqūf とペルシア語で注記され，このチャガタイ語を ayı と讀むべきことが示されている。

る。『504のリズム』『アルーズ・リサーラス』『ワーリディーヤ・リサーラス』には，發音の注記はない。

(4) 構　　成

この寫本にはバーブルの５つの作品が，以下に示すような順序[16]で含まれている。なおこの５つの作品の内，『バーブル・ナーマ』を除く４作品については，從來，アーターバーイの寫本目錄では如何なる作品であるか同定されていなかった[17]。寫本の構成は以下のごとくである。

表紙　寫本名，寫本番號などが記されている。

表紙裏　複數の藏書印。

1～184ページ　『ムバイイン』。

185～186ページ　白紙。

187～303ページ　『504のリズム』。

304～377ページ　『アルーズ・リサーラス』(2)。

亂丁。本來この部分は379～455ページの『アルーズ・リサーラス』(1)の後に續くべきものである。アーターバーイはこの亂丁に氣づかず，187ページから377ページまでを詩の韻律學關係の１つの作品と見なした。

378ページ　白紙。

379～455ページ　『アルーズ・リサーラス』(1)。

456ページ　２つの藏書印。

457～1010ページ　『バーブル・ナーマ』。

1011～1012ページ　白紙。

1013～1036ページ　『ワーリディーヤ・リサーラス』。

これで明らかなごとく，寫本全體の約２分の１を『バーブル・ナーマ』が占めていることになる。

---

(16) この配列の順序に何か意味があるかは不明で，今後の研究課題である。

(17) ただし，ユジェルはこの寫本に『ムバイイン』と『アルーズ・リサーラス』が含まれていると推定していた。Bilâl Yücel, *Bâbür Dîvânı*（前掲），p. 17。

(5) 來　　歴

アーターバーイはこの寫本の表紙裏に見える藏書印などの情報から，この寫本の興味深い來歴を次のごとく記している。この寫本には，1022年ラビーゥ・ル・アッヴァル月27日（1613年5月17日）という日付が見え，またアーラムギール・シャー ʻĀlamgīr-shāh の名が見える。このアーラムギール・シャーとは，インドのムガル朝の君主アウラングゼーブ（在位1658-1707），ないしアズィーズッ・ディーン（在位1754-1760）を指す。つまり，この寫本はかつてムガル朝の帝室圖書館に所藏されていたものである。次いで1248年シャッワール月9日（1833年3月1日），この寫本がタブリーズで購入され，ダリウス圖書館 Kitāb-khāna-yi Dārāʼī の藏書となった。次いでこの寫本は，1277年ラビーゥ・ル・アッヴァル月14日（1860年9月30日），ムフスィン・ミールザー・ミーラーフールの仲介でカージャール朝の君主ナースィルッ・デイーン・シャー（在位1848-1896）に獻上され，以來，この寫本はテヘランにある。

この來歴を要約すると，バーブルの5つの作品とそのペルシア語譯を含むこの寫本は，まずムガル朝治下のインドで少なくとも1613年までに作成され，ムガル朝の帝室圖書館内に所藏された。その後，一時タブリーズのダリウス圖書館の所藏本となったが，やがてテヘランを首府としたカージャール朝の有に歸し，以後テヘランのゴレスターン宮殿内の帝室圖書館に所藏されているということになる。

(6) 寫本作成年代

この寫本の表紙裏に見えるイラン帝室圖書館の藏書印では寫本の作成年代を935年（1528—29年）とし，現在の表紙にもそのように記されている[18]。このため，アーターバーイやスルターノフもこれを踏襲し，この寫本がバーブルが死沒する937年（1530年）より以前，すなわちバーブル生存中に作成された寫本と考えた。しかし，これは完全な誤解である。

---

(18) トガンはこれを931年としているが，何らかの勘違い，ないし935年の誤植であろう。Z. V. Togan, “Tahran kütüphanelerinde Hindistan’dan gelen eserlerde Çagatay dil ve Temürlü sanat âbideleri”（前掲），p. 444。

この様な誤解が生れた理由は，以下のごとくである。この寫本全體の末尾，すなわち1036ページの最終の2行に，チャガタイ語で yıl toquz yüz edi vä otuz besh，ペルシア語で sāl-i nuhṣad sī u panj būd，すなわち「935年であった」と記されている。イラン帝室圖書館の藏書印への記載者やアーターバーイ，スルターノフらは，これをこの寫本全體の書寫が完了した年と解釋したのである。

しかしこの「935年であった」という語句は，この寫本全體に關わるコロフォンではなく，この寫本の1013～1036ページに含まれる『ワーリディーヤ・リサーラス』の最終行の語句に過ぎない。すなわち，『ワーリディーヤ・リサーラス』の校訂テキストで確認すると，その末尾には bil tükätkändä bu söz bī kam u bīsh, yıl toquz yüz edi vä otuz besh，すなわち「この作品が最終的な形を取ったのは935年であったことを知れ」とある[19]のである。

『バーブル・ナーマ』の935年（1528-29年）の條[20]にも，

同月（サファル月）23日金曜日[21]，私の身體に熱が出た。集團禮拜をモスクで苦しみながらやっとすませた程であった。圖書室に行って，そこで少したって正午の禮拜をようやくにしてすませた。

2日後の日曜日，熱が出て，少し震えがきた。

サファル月27日火曜日の夜，私の心に，〔ナクシュバンディー教團の〕ホージャ・ウバイドゥッラー猊下の『ワーリディーヤ・リサーラス』を韻文化しようという考えが浮かんだ。猊下の靈におすがりしつつ，私の心に次のような考えが浮んだのであった。すなわち，もしこの韻文がかの猊下に受け入れられるならば，ちょうど『カスィーダ・イ・ブルダ』の著

(19) A. J. E. Bodrogligeti, "Bābur Shāh's Chagatay Version of the *Risāla-i Vālidīya*: A Central Asian Turkic Treatise on How to Emulate the Prophet Muhammad," *Ural-Altaische Jahrbücher*, 56, 1984, p. 43; N. Akmal Ayyubi, *A Versified Treatise on Mysticism of Ẓahīr-ud Dīn Muḥammad Bābur or The Risāle-i Wālidiyye Terjümesi*, Aligarh, 1968, p. 51 に見える『ワーリディーヤ・リサーラス』の校訂テキスト末尾を見よ。なお，アイユービーの文獻は，インドに留學中であった眞下裕之氏の好意で原本を入手し利用することができた。眞下氏に謝意を表したい。

(20) 校訂本，554～555ページ。

(21) 1528年11月6日。

者[22]のカスィーダが受け入れられ，彼自身，麻痺の病から解放されたように，私もこの病から救われ，それが私の韻文が受け入れられた事の證しとなるであろうと。

私はこの意圖のもとに，マウラーナー・アブドゥッ・ラフマーン・ジャーミーの『スブハ[23]』にも使用されている，最終脚が時にアブタル，時にマフブーンである「ラマレ・モサッダセ・マフブーン[24]」の韻律を用いて，『リサーラ』の韻文化に着手した。その夜も13のバイト[25]を作った。日に10バイト以下しか作らぬなどという事のないようにという義務の如きものを自分に課した。せいぜい1日休んだのみであった。昨年，というよりいつであれ，このような病にかかった時は，病が少くとも1カ月ないし40日續いた。神の恩惠と猊下の恩愛によって，29日木曜日に少し具合が惡かった以外は，この病から解放された。

（935年）ラビーゥ・ル・アッヴァル月8日土曜日[26]，『リサーラ』の文章を韻文化する仕事が完成した。1日に42バイトを作った。

とあるごとく，『ワーリディーヤ・リサーラス』の仕事は確かに935年に完了しているのである。「935年であった」の935年は，『ワーリディーヤ・リサーラス』の完成年代を指すに過ぎないのである。

それでは，この寫本全體はいつ作成されたものであろうか。

後に詳しく説明するように，この寫本の『バーブル・ナーマ』の部分のチャ

---

(22) ブースィーリー Sharaf al-Dīn Muḥammad al-Būṣīrī (1212—1295年頃) を指す。ベルベル人のエジプトのスーフィー詩人。書家，傳承學者，『コーラン』の讀誦者としても知られたが，特に預言者マホメットを讚えた *Qaṣīda al-Burda* の著者として名高い。EI, new ed., Supplement, 3-4, 1981 參照。

(23) ジャーミーのマスナヴィー體の詩形による7部作『7つの玉座 *Haft Avrang*』の內の1作品，『敬虔なる者たちの數珠 *Subḥat al-Abrār*』を指す。神祕主義，生活倫理など，宗教を主題にした作品。

(24) Ramal-i musaddas-i makhbūn。短短長長 / 短短長長 / 短短長の韻律。最終脚が abtar である場合は，最終脚は，短短長ではなく，長。この點については，*The Baburnama. Memoirs of Babur, Prince and Emperor*, Translated, Edited, and Annotated by Wheeler M. Thackston, New York & Oxford, 1996, p. 410, n. 194 をも參照した。

(25) bayt。詩の，對になった2つの半句（miṣrāʿ）からなる1行のこと。13のバイトとは，13行を意味する。

(26) 1528年11月20日。

ガタイ語本文に對するペルシア語對譯は，アブドゥッ・ラヒーム・ハーネ・ハーナーン ‘Abd al-Raḥīm Khān-i Khānān の有名なペルシア語譯を，若干の變更を加えつつ，ほとんどそのまま利用したものである。ハーネ・ハーナーンのペルシア語譯は1589年に完成した。この事實から考えれば，この寫本の，少なくとも『バーブル・ナーマ』の部分は，1589年以後に作成されたものであることは明らかである。また，この寫本が1613年にはすでに存在していたという先のアーターバーイの記述を參照すれば，この寫本が，1613年以前に作成されたものであることも明らかである。

また，この寫本は全體が同じ１人の筆跡で書かれている。この點を考慮に入れれば，この寫本全體が，1589年以降，1613年以前に作成された寫本であることは明らかである。從って，スルターノフのいうような，バーブルの生存中に作成された驚くべき寫本ではない。

しかし，今日に傳えられるバーブルの著作の寫本の中では，作成年代が比較的古い時代に屬する貴重な寫本であることは確實である。

以下，『バーブル著作集』に含まれる個々の作品ごとに，制作年代順に，その概要を報告したい。

2 『ムバイイン』

バーブルの『ムバイイン(27)』，すなわち『解說』と呼ばれる韻文の作品は，バーブルが，1522〜23年，なお10代前半の次男のカームラーンのために，ハナフィー派のイスラーム教徒が守るべき規定について，分かりやすく解說したイスラーム法關係の作品である。この作品については，1905年にタシュケントでテキストが出版されているが(28)，稀覯本でなお未見である。ただしこのテキストは校訂本ではないと思われる(29)。他に本書の「禮拜の章」はタシュケントでウ

(27) この作品は『ムビーン *Mubīn*』とか『ムバイヤン *Mubayyan*』と呼ばれることもあるが，本稿ではアズィムジャーノヴァらの呼稱に從い『ムバイイン *Mubayyin*』と呼ぶ。

(28) *Mubayyin al-islām*, Lith. ed., Tashkent, 1905。

(29) ウズベキスタンのアズィムジャーノヴァが現在も校訂本の出版を考えていることから考えて，このテキストは校訂本ではなく，單に１つの寫本を出版したものと思われる。

ズベク語でも出版されている[30]。アズィムジャーノヴァなどがすでにこの作品を利用した研究を發表しているが[31]，未だにその內容や構成についての十分な說明や，また校訂本・翻譯もなく，これからさらに研究する必要のある作品である。今回紹介するサルタナティー圖書館の『バーブル著作集』に，この『ムバイイン』の全編が含まれていることは貴重である。

いま，この寫本によってその構成を示すと以下のごとくである。

2～33ページ	總論	
33～121ページ	禮拜の章	Kitāb al-Ṣalvāt
122～128ページ	喜捨の章	Kitāb al-Zakāt
128～132ページ	斷食の章	Kitāb al-Ṣavm
147～184ページ	巡禮の章	Kitāb al-Ḥajj

ただし，この寫本をベルリンの國立圖書館の寫本[32]と比較してみると，落丁や混入がかなり見られる。例えば，この寫本の119ページ4行目まではベルリン本の58葉裏2行目までに當たるが，119ページの5行目以下には，ベルリン本でなお發見できなかった3行[33]とベルリン本76葉7～9行目に見える文章が混入されている。本寫本の次のページ，すなわち120ページは，ベルリン本64葉裏の8行目の文章から始まる。つまり，119ページと120ページの閒には，ベルリン本で58葉から64葉までの約6葉（12ページ）分の脫落や混入があることになる。また，本寫本の121ページは，ベルリン本の65葉裏3行目でおわる。122ページは，ベルリン本の69葉から始まる。つまり，121ページと122ページの閒にも，ベルリン本で約4葉分が缺けていることになる。この缺けた部分から「喜捨の章」が始まるため，本寫本には實はこの章名も缺けている。また，本寫本

(30) Заҳириддин Муҳаммад Бобур, *Китабу-с-салат*, Нашрга тайёрловчи: Саидбек Ҳасан, Масъур муҳаррир: Алибек Рустам, Тошкент, 1993.

(31) С. А. Азимджанова, "Экономические взгляды Захириддина Мухаммада Бабура," *Из истории развития общественно-экономической мысли в Узбекистане в ХУ-ХУI вв.*, Ташкент, 1960; тоже, "Некоторые экономические взгляды Захир ад-Дина Мухаммада Бабура, изложенние в «Мубайине»" *Трубы ХХУ Международного конгресса востоковедов, Москва, 9-16 августа 1960*, Том 3, Москва, 1963.

(32) Staatsbibliotek Ms. or. oct. 2212。この寫本については故安藤志朗氏が將來したコピーを利用できた。

(33) この3行が，ベルリン本の缺落を補う部分か，それとも他のページからの混入か

の127ページと128ページの間にも，ベルリン本の約6葉分（71葉裏1行目から77葉表の2行目まで）が脱落している。

このように本寫本には，おそらくは製本などの際に生じたと思われる大きなページの脱落がある。この缺點にも關わらず，本寫本は『ムバイイン』の數少ない寫本[34]の1つとして，校訂本の作成に當たっては，當然參照されるべき價値を持つものといえる。

3 『アルーズ・リサーラス（韻律論）』

詩の韻律學に關する散文の著作である。この作品についての說明を，最近出版した『バーブル・ナーマの研究 Ⅲ 譯注』の解題[35]から引用すると，以下のごとくである。

> 詩の韻律について論じた韻律學に關する著作である。この著作は1523～1525年頃に著された[36]。散文の作品であるが，文中には多くの詩が引用されている。
>
> この著作には本來バーブル自身による書名が付けられていなかったらしい。そのためにこの作品は，今日，『韻律論（アルーズ・リサーラス）』と呼ばれたり，『小論（ムフタサル）』と呼ばれたりしている。しかし，この著作はパリ寫本で172葉（344ページ）というかなり大部の作品である。それ故，『小論』という名稱はこの著作の本來の書名としては必ずしも適當ではない。おそらくバーブルが自著を謙遜してこの様に呼んだものと考えられる。從ってここでも，バーブルのこの著作を『韻律論（アルーズ・リサーラス）』と呼んでおく。
>
> 1923年，この書の1寫本がパリの國立圖書館でトルコのM. F. キョプリ

は，現在の所決定できない。

(34) ベルリン本，サンクト・ペテルブルクの科學アカデミー東洋學研究所本，タシュケントの科學アカデミー東洋學研究所本，同文學研究所本などが知られている。

(35) 間野英二『バーブル・ナーマの研究 Ⅲ 譯注』，京都，松香堂，1998年，xxxvi-xxxvii ページ。

(36) Ẓахӣр ад-Дӣн Муḥаммад Бӣбур, *Трактат об ʻарӯẓе. Факсимиле рукописи.* Издание текста, вступительная статья и указатели И. В. Стеблевой, Москва, 1972, стр. 21.

ュリュによって發見され，1933年，E.ブロッシェが『國立圖書館トルコ語寫本目錄　第2卷』の中で1308の番號を付し『ムフタサル・フィル・アルーズ』として記述した。このパリ寫本のファクスィミールは，すでにロシアのI.V.ステブレーワ(37)とウズベキスタンのサイドベク・ハサン(38)によって出版されている。

このように，從來，この『アルーズ・リサーラス』については學界にはパリ本のみしか知られていなかった。ここに第2の寫本の存在が確認されたことになる。

ただしこのサルタナティー本は完本ではない。また亂丁，落丁が著しい。

サルタナティー本の379〜455ページがパリ本の1葉冒頭から46葉表13行目までに相當する。しかし411ページはパリ本の10葉13行目で終わり，412ページはパリ本の15葉5行目から始まる。すなわち，411ページと412ページの閒にはパリ本の4葉分以上の脫落がある。413ページと414ページの閒には，パリ本の約9葉分，421ページと422ページの閒にはパリ本の約5葉分，433ページと434ページの閒にはパリ本の約6葉分，442ページと443ページの閒にはパリ本の約5葉分を缺く。またパリ本の13葉表・裏，14葉表・裏，15葉表・裏，16葉裏などに見える韻律に關わる「圓 dā'ira」の圖は全て省かれ，また，パリ本46葉裏，47葉表に見える「分岐圖 shajara」も含まれない。

この分岐圖に續く部分は，サルタナティー本では，304〜376ページに誤って綴じられている。パリ本の47葉裏の冒頭から91葉裏6行目の途中までに相當するこの部分は，特に亂丁，落丁が目立つ。339ページと340ページの閒にパリ本の約2葉分，347ページと348ページの閒にパリ本の約5葉分，361ページと362ページの閒にパリ本の約2葉分，367ページと368ページの閒にパリ本の約5葉分以上，371ページと372ページの閒にパリ本の約3葉分を缺く。また，355ページは，本來368ページの後に續くべきページである。

---

(37) ステブレーワ，前揭書。

(38) Заҳириддин Муҳаммад Бобир, *Мухтасар*, Нашрга тайёрловчи: Саидбек Ҳасан, Масъур муҳаррир: Ҳамид Сулаймон, Тошкент, 1971. パリ寫本の美麗なファクスィミールとテキストのウズベク文字による轉寫を含む本書は久保一之氏の好意でその所藏本を參照できた。記して謝意を表したい。

この『アルーズ・リサーラス』はパリ本で172葉を數えるかなり大部な作品である。しかしサルタナティー本はパリ本の91葉6行目前半までしかなく，かなり不完全な寫本といえる。おそらくは，製本などの段階で多くの部分が失われたのであろう。ただし，殘存している部分は優れた寫本で，パリ本と並ぶ第2の寫本として校訂作業に利用できることは確實である。

4 『504のリズム』

サルタナティー本の187～303ページを占めるこの著作については，バーブル自身が『バーブル・ナーマ』の933年（1526-27年）の條[39]に，

> ズィー・ル・ヒッジャ月2日金曜日（1527年8月30日），私は41回讀む『コーラン』の一節の讀誦[40]をはじめた。
>
> まさにその同じ時期に，私は次の私の詩の一行（バイト），すなわち
>
> あなたの眼，眉，言葉，言いまわしについてお話ししましょうか？
>
> あなたの體つき，ほほ，髪，腰についてお話ししましょうか？
>
> を，504通りのワズン（リズム）でリズム分析した[41]。私はこれについて論文（リサーラ）を用意した。

と記している。

この記事から，バーブルのこの論文の完成年代が1527年であることは明らかである。なお，この記事からは，この論文に名稱が付けられたか否かは不明である。そのため，本稿では論文名として假に『504のリズム』という名稱を使用することにする。この『バーブル・ナーマ』の記事については，先にベヴァ

(39) 校訂本，529ページ。

(40) 病氣から早く回復するために，『コーラン』の中の特定の節を41回も繰り返し讀誦すること。

(41) リズム分析（taqṭīʿ）とは，詩の一行（バイト）を各種のリズムに分解し，そのリズムの呼稱とリズムの內容を明示することである。例えば，そのバイトが，モタカーレブ（mutaqārib）のバフル（韻律）に屬し，完全な8脚からなり（muthammanāt-i sālim），ʿarūḍ va ḍarb maḥdhūf と呼ばれるワズン（リズム）で，リズムの內容が，faʿūlun faʿūlun faʿūlun faʿal（短長長／短長長／短長長長／短長）であることを明示することを意味する。

リッジが少しふれたことはあった[42]。しかしバーブルのこの論文の詳細については不明で，學界ではこの論文はすでに散逸してしまったものと考えられていた。しかし，今回，このバーブルの作品がサルタナティー圖書館藏の『バーブル著作集』に含まれていることが初めて確認されたことになる。

學界未知の新資料であるため，ここではその內容をやや詳しく紹介したい。

このバーブルの論文は，以下に示すペルシア語による短い序文[43]に始まる。なお新資料であるため，より正確にバーブルの綴り字をも傳えるため，序文はローマ字轉寫ではなく，アラビア文字のままで掲載する。

بسم الله الرحمن الرحیم

بعد از حمد و سپاس و درود بیقیاس چنین کوید سر کشتهٔ وادی تحیّر ظهیر الدّین محمد بابر، در آن تاریخ که عروض من بخراسان رفت، یکی از شعرای آن جانب این بیت

قاشغه بارغالی کونکول اوزیکا کیلمادی نیتای　　یوزیکا توشکالی کوزوم کوزیکا ایلمادی اول ای

در دویست و پنجاه و دو وزن تقطیع کرده نوشته فرستاده بود، الحق تحقیق تمام کرده و تدقیق لا کلام بجا آورده، ولی از انواع وزن شعر که، مثمن و مسدس و مربعست، در یک نوع مثمن راست می آید، در دو نوع دیکر که، مسدس و مربع باشد، راست نمی آید، دیکر این همه اوزان از بحر بود از دوازده بحر باقی وزنی نبود، بخاطر فاتر رسید که، اکر بیتی باشد که، جامع جمیع انواع وزن شعر باشد، و از اوزان هر بیست و یک بحر در آن باشد، پسندیده تر خواهد بود، این بیت خودرا

کوز و قاش و سوز [و] تیلی نی مو دی　　خد و قد و ساج و تیلی نی مو دی

در پانصد و چهار وزن تقطیع کرد، و در جمیع انواع وزن که، مثمن و مسدس و مربع باشد، خواند، و درین بیت از هر بیست و یک بحر اوزان آورد، چنانکه خوانندهٔ این اجزا و اوراق را روشن و دانندهٔ این ارکان و اوزان را مبین خواهد بود، ملتمس آنکه اکر سهو و خطائی باشد بپوشند، بلکه به تصحیح و بصلاح آن بکوشد

慈悲ふかく慈愛あまねきアッラーのみ名において

（アッラーに）限りなき賞贊と感謝と贊美を捧げた後，惑いの廣野にさまよう者ザヒールッ・ディーン・ムハンマド・バーブルは以下のごとく述

(42) A. S. Beveridge, *The Bābur-nāma in English* (*Memoirs of Bābur*), Translated from the original Turki Text of Ẓahiru'd-dīn Muḥammad Bābur Pādshāh Ghāzī, 2 Vols., London, 1922; Repr. in one Volume, London, 1969; p. lxv。

(43) この序文のやや意味が取りにくい部分の解釋については，羽田亨一氏に意見を求めた。適切な教示を賜った氏のご好意に謝意を表したい。

べる。

私の韻律論がホラーサーンにもたらされた時，同地方の詩人の一人が，

qashıgha barghalı köngül özigä kelmädi netäy

yüzigä tüshgäli közüm közigä ılmay ol ay

我が心がその傍ら(44)に行って以來，私は正氣にもどらぬ。どうしたら良いか。

我がまなこがその顔に注がれて以來，かの月は私を目に留めてもくれぬ。

というバイト(45)を252通りのワズン（詩のリズム）でリズム分析（taqṭī'）して，書き送ってきた。

まことによく研究され，一言もないほどよく注意が拂われていた。しかし，諸々の詩のワズン——8脚（muthamman），6脚（musaddas），4脚（murabba'）がある——のうちの1種，すなわち8脚ではピッタリだが，他の2種，すなわち6脚と4脚ではピッタリでない。

さらにまた，ここに記された全てのワズンは12種のバフル（韻律）に屬するものであり，他の殘りのバフルに屬する1つのワズンも記されていなかった。

愚かな私の腦裏に，もし詩の全ての種類のワズンを網羅し，（さらにまた）21種のバフルに屬する種々のワズンがその中に含まれる1つのバイトがあったなら，もっと素晴らしいだろうという考えが浮かんだ。（それで）次の自作のバイト，すなわち

köz u qash u söz [u](46) tilini mu dey

khadd u qad u sach u belini mu dey

あなたの眼，眉，言葉，言いまわしにについてお話ししましょう

(44) qash は本來は「眉」の意味であるが，比喩的に，「傍ら」「側」の意味でも使用される。Sir Gerard Clauson, *Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth Century Turkish*, Oxford, 1972, p. 669。

(45) このバイトはバーブル自身の作品である。このバイトは，例えば，Bilâl Yücel, *Bâbür Dîvânı*（前掲），p. 306, No. 520 に見える。

(46) この u はサルタナティー本には欠けているが，『バーブル・ナーマ』に引用されている同じバイトを根據に修正した。

か？

あなたの體つき，ほほ，髪，腰についてお話ししましょうか？

というバイトを504通りのワズンでリズム分析した。そして全ての種類のワズン，すなわち8脚，6脚，4脚で誦んだ。そしてこの中に21種類のバフルに屬するワズンを入れた。

（この小論が）これらの節やページの讀者にとって明快で，これらの脚やワズンを知っている者たちに明瞭であらんことを。もし至らぬ所や誤りがあれば，ご寛恕のうえ，訂正・改良にご盡力頂きたい。

以上が，『504のリズム』序文の原文とその和譯である。バーブルの『アルーズ・リサーラス』に見える記述[47]によれば，バーブルは1506年，ウズベクのシャイバーニー・ハーンと對決すべくホラーサーンに赴いた際に，その地で見た韻律學關係の書物から詩のリズム分析に興味を持ち始めたようである。以來20年以上も興味を持ち續け，1527年，研究の成果をここで扱っているような1つの論文の形にまとめあげたものである。

この序文の後にリズム分析が續く。リズム分析とは如何なるものであるかを示すため，以下に序文に續く3つのリズム分析の實例をあげる。なおここで使用されている mutaqārib, bahr, muthammanāt, sālim, ʻarūz, ḍarb, maḥdhūf などの韻律學關係の術語の意味の説明は，專門的な研究書[48]の記述に讓りたい。

bahr-i mutaqārib（モタカーレブの韻律）　22[49]

muthammanāt-i sālim（完全な8脚）

(1) ʻarūz va ḍarb maḥdhūf（第1の半句と第2の半句の各最終脚がfaʻal）

kö-zū-qā / shᵉ-sō̄-zū / ti-lī-nī / mi-dey

kha-ddū-qad / u sā-chū / be-lī-nī / mi-dey

---

(47) パリ本，36a–36b。サルタナティー本，pp. 435–437。

(48) Finn Thiesen, *A Manual of Classical Persian Prosody*, Wiesbaden, 1982 の記述が最も簡明である。

(49) モタカーレブのバフル（韻律）に屬する22箇のワズンが記されているという意味であろう。しかし寫本には，實際には22箇ではなく30箇のワズンが記されている。これは，モタカーレブに限らず，21種類のバフルの內，數が合うのはモジュタッスなど5つのバフルにしか過ぎない。これをどのように解釋すべきかは今後の課題としたい。

fa'ūlun fa'ūlun fa'ūlun fa'al (短長長　短長長　短長長　短長)

(2) duvvum rukn-i ḥashv maqbūḍ, ḍarbayn maḥdhūf

(中間の第2番目の脚が fa'ul, 第1第2の兩半句の最終脚が fa'al)

kö-zū-qā / shᵉ-sō-zū / ti-lī-nᵉ / mi-dey

kha-ddū-qad / u-sā-chū / be-lī-nᵉ / mi-dey

fa'ūlun fa'ūlun fa'ūl fa'al (短長長　短長長　短長短　短長)

(3) avval rukn-i ḥashv maqbūḍ, ḍarbayn maḥdhūf

(中間の第1番目の脚が fa'ūl, 第1第2の兩半句の最終脚が fa'al)

kö-zū-qā / shᵒ-sō-zᵉ / ti-lī-nī / mi-dey

kha-ddū-qad / u-sā-chᵉ / be-lī-nī / mi-dey

fa'ūlun fa'ūl fa'ūlun fa'al (短長長　短長短　短長長　短長)

この様なリズム分析が寫本の190ページから303ページまで續く。この中には，序文で述べられていたように，mutaqārib, mutadārik, hazaj, rajaz, ramal, qarīb, jadīd, vāfir, mujtathth, sarī', basīṭ, 'amīq, kāmil, līvaṭ, khafīf, madīd, 'ārid, muqtaḍab, munsariḥ, muḍāri', mushākil の21箇のバフルに屬する498箇のワズンが含まれている。バーブルの序文によれば，この論文には504箇のワズンが含まれたはずである。しかしこの寫本では498箇しか見えない。殘る6箇はおそらく書寫の途中で書き落とされたものであろう。

この『504のワズン』は，現在の所，サルタナティー本が天下の孤本であり，バーブルの韻律學關係の新資料として，ファクスイミールなどの形で早急に公表されるべきものと考える。

5 『バーブル・ナーマ』

『バーブル・ナーマの研究 I 校訂本』の序論で述べたように[50]，現存する『バーブル・ナーマ』には大きな缺落があり，現在われわれが手にすることが出來るのは，本來バーブルが執筆したはずの36年分の記事のうち，約20年分の記事にしかすぎない。

(50) 校訂本，xxiii-xxiv ページ。

先の校訂本により，現在，われわれの手に残されている『バーブル・ナーマ』の内容を示すと，

第1部　フェルガーナ（中央アジア）

899年の出來事　900年の出來事　901年の出來事

902年の出來事　903年の出來事　904年の出來事

905年の出來事　906年の出來事　907年の出來事

908年の出來事

第2部　カーブル（アフガニスタン）

910年の出來事　911年の出來事　912年の出來事

913年の出來事　914年の出來事（途中まで）

925年の出來事　926年の出來事

第3部　ヒンドゥスターン（インド）

932年の出來事　933年の出來事　934年の出來事

935年の出來事　936年の出來事（途中まで）

となる。これに對してサルタナティー本に含まれているのは，

第1部　フェルガーナ（中央アジア）

899年の出來事　900年の出來事　901年の出來事（途中まで[51]）

902年の出來事（途中から[52]）　903年の出來事　904年の出來事

905年の出來事　906年の出來事（途中まで[53]）

第2部　カーブル（アフガニスタン）

925年の出來事（途中まで[54]）

第3部　ヒンドゥスターン（インド）

932年の出來事　933年の出來事（途中まで[55]）

---

(51) 校訂本56ページ9行目の Mirzā-gha qaptı まで。以下，校訂本で約1ページ分が缺落。

(52) 校訂本59ページ7行目の mi'ād-bilä から。この前に，校訂本で約1ページ分が缺落。

(53) 校訂本132ページ15行目の bir tīrgäz atımı まで。これに間隔を全く空けずに，校訂本340ページの925年の記事が續いている。

(54) 校訂本380ページ21行目の barıp edi keldi まで。これに2行分の空白部をはさんで，校訂本430ページの932年の記事が續いている。

(55) 校訂本501ページ7行目の ni girdini berkitük まで。この部分については本文でふれる。

である。

この両者を比較すれば明らかなごとく，サルタナティー本には，校訂本に存在する907，908，910，911，912，913，914，926，934，935，936年の記事を全く缺く。また，901，906，925，933年の記事も途中で途切れている。この寫本の『バーブル・ナーマ』の末尾は，933年の途中，校訂本の501ページ7行目までである。この末尾は，ni girdini berkitük という『バーブル・ナーマ』の不完全な文章に續いて，本來の『バーブル・ナーマ』に含まれない「アッラーは全てをよくご存じである（va Allāhu bi-kulli shay'in 'alīmun)」というアラブ語の決まり文句で終わっている。

このようにサルタナティー本の『バーブル・ナーマ』は，分量的には不完全な寫本であり，從って，時期的には原本の多くの部分が失われてしまった時期になって作成された寫本である。しかし質的には，すぐ後の本文で述べるように，現存する部分は，ハイダラーバード本やエディンバラ本（エルフィンストーン本）に匹敵する優秀な寫本である。それ故，校訂作業にも利用すべき寫本であると考える。寫本作成者による校正もかなり行われた形跡がある[56]。

ただ，校訂本と比較すると，1行～數行分が拔けていたり（例：459ページ13行目の girdāgirdi と tamām の閒に khandaq-nıng tash yanı sang-rīzä-lik shāh rāh tüshüp tur qal'a-nıng girdāgirdi が缺落[57]），數語が拔けていたり（例：462ページ13行目の yoqtur と Andijān の閒に yana bir Margīnān dur が缺落），數語が重複して書かれていたりする場合（例：475ページ5行目と7行目に bar erdi khuluqı daghı sakhāvatıcha が2度續けて書かれている）がかなり見られる。ただしこれは，優良な寫本とされるハイダラーバード本やエディンバラ本でも見られる缺陷[58]で，特にこの寫本の價値を損なうものではない。

この寫本の『バーブル・ナーマ』第1部フェルガーナ章の冒頭，すなわち

---

(56) 例えば，481ページの欄外には，本文に書き落とした約2行分の文章が補ってある。

(57) この他，數行が脫落している例をあげると，本寫本495ページ13行目の edi と ākhir の閒には，校訂本20ページ21行後半以下の約3行半分が脫落している。

(58) ハイダラーバード本やエディンバラ本に見られる缺陷については，校訂本の序論の4，5を見よ。

899年の部分（457～528ページ）と校訂本の同じ899年の部分（3～35ページ）とを1語1語，逐一比較したところ，校訂本を訂正すべき次の2ヶ所が發見された。

1つめは，校訂本の8ページ3行目に agarcha qaṣaba emäs edi（都市ではなかったが）とあるが，この寫本の466ページ1行目には agarcha ulugh qaṣaba emäs edi（大きい都市ではなかったが）と見える。この場合，この寫本の方が，バーブルの原本により近いことは，ペルシア語譯にも agarcha qaṣaba-yi kalānī nīst と見える[59]ことから推定できる。

2つめは，校訂本の25ページ3行目に Chir suyı-nıng gudharı-da oq shikast tapıp edilär（まさにチル川の渡しで敗北を喫した）とあるが，この寫本の504ページ17行目から505ページ1行目にかけて Chir suyı-nıng gudharı-da ulugh shikast tapıp edilär（チル川の渡しで大敗を喫した）と見える。この場合も，この寫本の方が原本に近いことは，ペルシア語譯にも dar gudhar-i daryā-yi Chir shikast-i kalānī yāfta būdand と見える[60]ことから推定できる。

校訂本で35ページ分を占める899年の部分に關し，サルタナティー本によって校訂本を訂正すべき箇所はこの2ヶ所のみである。これは，この寫本の價値を定める上である程度の目安になる。2ヶ所とはいえ，この寫本を校訂本の訂正に利用できることから考えれば，この寫本の價値は高いといえる。しかし，35ページでわずかに2ヶ所のみという點に着目すれば，この寫本は，筆者が校訂に利用した諸寫本を質的に特に越えるものではないともいえる。

筆者は先に校訂本の「はじめに」で[61]，筆者が校訂に際し利用できなかった寫本について言及した後，

> ただ，今回は，現在知られている限りのチャガタイ語寫本の中で，優良さの點で1，2を爭うハイダラーバード，エディンバラ（エルフィンストーン）の兩寫本を共に利用できたので，たとえこれらの未見の寫本（サルタナティ

(59) Wheeler M. Thackston, Jr., *Zahiruddin Muhammad Babur Mirza, Bâbur-nâma*, Chaghatay Turkish Text with Abdul-Rahim Khankhanan's Persian Translation, Turkish Transcription, Persian Edition and English Translation, 3 Vols., Cambridge, Mass., 1993, Vol. 1, p. 8。

(60) ibid., p. 32。

(61) 校訂本，x ページ。

ー本などを指す）を利用していたとしても，本校訂本にそれほどの變更を加える必要もなかったであろうと推定している。

と記した。サルタナティー本に接しえた現在も，この推定は誤っていなかったと考えている。しかし，この寫本が，その箇所は少ないとはいえ，校訂本の訂正に利用できることは事實であり，今後は，この寫本をも利用して，校訂本の改訂を心がけたいと考えている。

次に，この寫本の各ページの偶數行に記された『バーブル・ナーマ』のペルシア語譯について述べたい。

まず，第1部フェルガーナ章の冒頭，すなわち899年の冒頭に見える，この寫本のペルシア語譯[62]をローマ字轉寫して掲げる。/ は改行を意味する。

dar māh-i ramaḍān sana-yi hashtṣad u navad u nuh dar vilāyat-i Farghāna / dar sann-i davāzdah sāligī pādishāh shudam. vilāyat-i Farghāna az ʻiqlīm-i panjum ast. / va dar kanāra-yi maʻmūra vāqiʻ shuda ast. sharqī-yi ū Kāshghar, gharbī-yi ū Samarqand / va janūbī Kūhistān sar ḥadd-i Badakhshān va dar samt-i shumālī-yi ū agarcha pīsh-i īn shahr-hā / būda ast mithl-i Almālīgh va Almatū va Yāngī, ki dar kutub-i tavārīkh Uṭrār mashhūr ast, az jihat-i / Moghūl va Uzbeg darīn tārīkh vīrān shuda aṣla maʻmūra namānda ast / va īn vilāyat-i Farghāna mukhtaṣar ast. ghalla va mīva-ash farāvān ast.

次に，ムガル朝第3代皇帝アクバルの命で，アブドゥッ・ラフマーン・ハーネ・ハーナーンが1589年に完成したペルシア語譯の同じ箇所を，サックストンの校訂本[63]によって掲げる。ただし，サックストンの校訂の明らかな誤りは，他の寫本[64]によって訂正した。

dar māh-i ramaḍān sana-yi hashtṣad u navad u nuh dar vilāyat-i Farghāna dar davāzdah sāligī pādishāh shudam. / vilāyat-i Farghāna az ʻiqlīm-i panjum ast. va dar kanāra-yi maʻmūra-yi ʻālam vāqiʻ shuda. sharqī-yi ū Kāshghar, / va gharbī Samarqand va janūbī Kūhistān sar

(62) 寫本の457～458ページ。
(63) Wheeler M. Thackston, Jr., ibid., p. 2。
(64) Vāqiʻāt-i Bāburī, Bibliothèque Nationale (Paris) MS. Suppl. persan 265。

ḥadd-i Badakhshān va dar shumālī-yi ū agarcha pīsh az īn shahr-hā / būda mithl-i Almālīgh va Almatū va Yāngī, ki dar kutub-i tārīkh ba-Uṭrār mashhūr ast, ammā az jihat-i / ʻubūr-i (正しくは Moghūl va) Uzbeg darīn tārīkh vīrān shuda va aṣla maʻmūra namānda / va īn Farghāna mukhtaṣar vilāyatīst. ammā mīva va ghalla farāvānst.

同様に，もう1箇所，第3部ヒンドゥスターン章の冒頭，すなわち932年の冒頭に見える，この寫本のペルシア語譯[65]を掲げる。

dar rūz-i jumʻa gharra-yi shahr-i ṣafar ba-tārīkh-i nuhṣad u sī u dū ki / āftāb dar burj-i qūs būd ba-ʻazīmat-i Hindūstān safar karda az pushta-yi Yak-langa gudhashta az ṭaraf-i gharbī-yi Āb-i Dih-i Yaʻqūb ba-avlang furūd āmada shud.

この同じ部分のハーネ・ハーナーンの譯[66]を掲げる。

rūz-i jumʻa gharra-yi māh-i ṣafar dar tārīkh-i sana-yi nuhṣad u sī u dū ki / āftāb dar burj-i qūs būd ba-ʻazīmat-i Hindūstān safar karda az pushta-yi Yak-langa gudhashta dar avlangī ki ba-ṭaraf-i gharbī-yi Āb-i Dih-i Yaʻqūb ast furūd āmada shud.

以上の2箇所における2種類の譯文を比較すると，兩者の間には下線を施したような幾つかの相違點が見られる。しかしそれらの相違は些細なものであり，この2種類の譯は極めて類似しているといえるであろう。そして，この類似から考えれば，どちらかがどちらかを利用したものであることは明らかであろう。それでは，どちらがどちらを利用したものであろうか。つまり，どちらの譯が先に存在したのであろうか[67]。

この答えは，2つのペルシア語譯の內容を比較して，どちらがより優れているかを決定することによって得られる，と思われる。そしてこの場合，優れた譯が，劣った譯を利用するとは考えられないから，內容的に優れている方が，先に存在していたと考えるのが自然である。それ故，以下に兩者の內容の優劣

(65) 寫本の837～838ページ。
(66) Wheeler M. Thackston, Jr., ibid., p. 538。
(67) この問題を考えるに當たって，田邊眞實氏から有益な意見を賜った。記して謝意を表したい。

を比較してみたい。

まず分量である。ハーネ・ハーナーンのペルシア語譯は，『バーブル・ナーマ』校訂本のチャガタイ語原文のほとんど全ての部分の譯を含んでいる[68]。これに對し，サルタナティー本のペルシア語譯は，先述のごとくチャガタイ語の原文そのものがあまりにも多くの缺落部を含むため，その對譯という性格から，原文に對應するあまりにも多くの缺落部を含む。すなわち，分量の點から見て，ハーネ・ハーナーンの譯がはるかに優れている。

次に質の問題である。ハーネ・ハーナーンのペルシア語譯は，チャガタイ語の原文をきわめて忠實に譯したものとして定評がある[69]。サルタナティー本のペルシア語譯もチャガタイ語の原文に忠實であるという點では同じである。しかし，後者には，以下に說明する際だった特徵が見られる。

先述のごとく，サルタナティー本のペルシア語譯は，チャガタイ語のすぐ下に書かれた對譯という形を取っている。そのため，チャガタイ語の文章に缺落のある場合にも，缺落のあるまま，忠實にペルシア語への翻譯を行っている。

例えば，サルタナティー本485ページ5行目のチャガタイ文には barıdın ulugh oghlı という文が見える。しかし校訂本の16ページ11〜12行に barıdın uluq Mihr Nigār Khānım edi kim Sulṭān Abū Sa'īd Mīrzā uluq oghlı とあるように，サルタナティー本では ulugh と oghlı の閒に Mihr Nigār Khānım に始まる1行分ほどの文章が脫落している。ところが，サルタナティー本のペルシア語譯の譯者は，このチャガタイ文に忠實に，az hama kalān pisarash と譯出している。ハーネ・ハーナーンの譯[70]では，kalān Mihr Nigār Khānim būd ki Sulṭān Abū Sa'īd Mīrzā pisar-i kalān-i khud となっている。この譯は，校訂本のチャガタイ文に一致するものであり，サルタナティー本のペルシア語譯が，本來の『バーブル・ナーマ』の文章とはまったくかけ離れた內容のものとなっていることは明瞭である。

---

(68) このことは，サックストンが出版した『バーブル・ナーマ』(Wheeler M. Thackston, Jr., ibid.) において，見開きの2ページのうち，左側の偶數ページにハーネ・ハーナーンのペルシア語譯文を，そして右側の奇數ページにペルシア語譯文に對應するチャガタイ語原文を記載していることからも容易に理解されるであろう。

(69) 校訂本，解題の7「ペルシア語譯本の性格」(xxxix-xl ページ) を參照されたい。

(70) Wheeler M. Thackston, J r., ibid., p. 20。

なお，サルタナティー本に見える az hama はハーネ・ハーナーン譯には見えない。これはチャガタイ文の barıdın をより忠實に譯出したものといえる。また pisarash もハーネ・ハーナーンの譯とは異なるが，これもチャガタイ文の oghlı をそのまま忠實に譯出したものといえる。

このように，サルタナティー本のペルシア語譯はチャガタイ文に忠實である。しかし缺落部にも忠實であるため，本來の『バーブル・ナーマ』の譯文としては，質的に劣ったものとなっている。つまり，質的に見ても，ハーネ・ハーナーンの譯がはるかに優れている。

このように，量的にも質的にも，ハーネ・ハーナーン本のペルシア語譯がサルタナティー本のペルシア語譯より優れている。そうであれば，サルタナティー本の譯が，ハーネ・ハーナーンの譯を利用したものであることは明らかであろう。その逆はあり得ない。つまり，ハーネ・ハーナーンのペルシア語譯が，サルタナティー本のペルシア語譯より先に存在したと結論づけることができる。

ロシアのスルターノフは，サルタナティー本『バーブル・ナーマ』のチャガタイ語原文の寫本がバーブル生存中の935年に作成されたものと考えた。そのため，そのペルシア語譯も，同様にバーブルの生存中に作成されたものと考えた。この考えは，ペルシア語譯はバーブルの孫のアクバルの時代になって初めて作成されたという通說とは著しく異なる新說であった。しかし，アクバルの時代に作成されたハーネ・ハーナーンのペルシア語譯がサルタナティー本のペルシア語譯に利用されている以上，この新說は成り立ち得ない。『バーブル・ナーマ』のペルシア語譯は，やはりアクバルの時代になって初めて作成されたものである。

また，サルタナティー本の『バーブル・ナーマ』にハーネ・ハーナーンのペルシア語譯が利用されていることは，サルタナティー本の『バーブル・ナーマ』が1589年以後に作成されたものであることを物語る。この事實は，すでに述べたように，サルタナティー本全體の作成年代を推定するのにも利用できるのである。

6 『ワーリディーヤ・リサーラス』

まず，『ワーリディーヤ・リサーラス』の作成事情についての説明を，筆者による『バーブル・ナーマの研究 Ⅲ 譯注』[71] の解題の部分から引用する。

> 1527年の夏ころからバーブルの體調は思わしくなかった。1528年秋以降も體調を崩し，11月には發熱して集團禮拜も苦しみつつようやく濟ませる有り様であった。バーブルはイスラームの聖者の靈にすがってこの病から回復したいと考え，ナクシュバンディー教團のホージャ・ウバイドゥッラー・アフラールのイスラーム神祕主義に關する著作『ワーリディーヤ（父のための書）』の韻文化を思い立った。ホージャの靈がバーブルのこの努力を認めれば，病から解放されると考えたのである。バーブルは，同じくナクシュバンディー教團の有力な一員であったジャーミーの著作『スブハトゥ・ル・アブラール』に使用されている韻律と同じ韻律を採用して，11月9日の夜から韻文化に着手，1日に10バイト以上を韻文化する事を自らの義務と定め，1528年11月20日に完成した。この間に彼の努力は效果をあらわし，病からも解放された。

現在，ホージャ・アフラールがその父の求めに應じて著した散文の『ワーリディーヤ（父のための書）』は散逸し，バーブルによって韻文化された作品のみが殘されている。

この作品は，イスラーム神祕主義者たちがめざす「アッラーとの合一」の境地に到達するには，どのような日々の修行が必要であるかを易しく說いた作品である。作品中では，「アッラーの他に神はなし」という句をズィクルとして常に念ずることが推賞されている。

バーブルのこの作品は，ロス，キョプリュリュ，アイユービー，ボドゥログリゲッティ，サイドベク・ハサン，ユジェル[72]ら，各國の研究者によって研究

(71) 京都，松香堂，1998年。

(72) E. D. Ross, "A Collection of Poems by the Emperor Babur (Divān-i-Babur Pādishāh)," *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, Vol. VI, Extra Number, 1910, pp. i–vi, 1–43; M. Fuad Köprülü, "Risāla-i Wālidiyya tercümesi, published by M. Fuad Köprülü," *Millî Tetebbûlar Mecmuası*, I, 1331/1915, s. 113–124; N. Akmal Ayyubi, *A Versified Treatise on Mysticism of Ẓahīr-ud Dīn Muḥa-*

され，すでに校訂テキスト・譯が出版されている。バーブルの『バーブル・ナーマ』以外の作品のうちでは，最もよく研究されている作品といえる。

この作品についてこれまでに學界に存在が知られていた寫本はボドゥログリゲッティによれば[73]以下の4種である。

(1) イスタンブール大學圖書館　T3743。

(2) パリ，國立圖書館　Suppl. turc 1230。

(3) インド，ラームプル，ラザー圖書館。

(4) イスタンブール，トプカプ宮殿圖書館。Revan 741。

サルタナティー本の『ワーリディーヤ・リサーラス』は，1017ページと1018ページの間に，アイユービーの校訂テキストの約3ページ分（3rの5行目から4vの1行目）を缺く以外は，ほぼ完全な寫本である。ただ，この作品についてはすでに4種類の寫本が知られ，2種類の校訂テキストも作成されているので，このサルタナティー本の發見はそれほど大きな意味を持たない。しかし，この寫本を第5の寫本として校訂テキストの補訂に利用できることは確實である。

結　　び

本稿で報告した學界未知の情報を要約すれば，以下のごとくである。

---

mmad Bābur or *The Risāle-i Wālidiyye Terjümesi*, Aligarh, 1968; A. J. E. Bodrogligeti, "Bābur Shāh's Chagatay Version of the *Risāla-i Vālidīya*: A Central Asian Turkic Treatise on How to Emulate the Prophet Muhammad," *Ural-Altaische Jahrbücher*, 56, 1984, pp. 1-61; *Ҳазрати Хожа Убайдулло Аҳрор, Рисолаи Волидия. Заҳириддин Муҳаммад Бобур таржимаси.* Ношир: Саидбек Ҳасан, Тошкент, 1991; Bilâl Yücel, *Bâbür Dîvânı* (*Gramer-Metin-Sözlük-Tıpkıbasım*), Ankara, 1995。眞下裕之氏から，かつてロスが出版したラームプルにある『リサーラ』の寫本のカラー印刷の部分を含むファクスィミール版（Siddiqi, W. H. (Editor of the *Journal*), Facsimile of the *Risāla*, *Rampur Raza Library Journal*, No. 3-1996）の存在についても教示を受け，それが掲載されている雜誌の供與にも與った。記して謝意を表したい。ただ，このファクスィミールは當該雜誌の32ページと33ページの中間に掲載されているが，編者名も表題もなく，これが何の目的でここに掲載されたかは不明である。そのため，編者名としては，當該雜誌そのものの編者名を假に記しておくことにする。

(73) A. J. E. Bodrogligeti, ibid, pp. 2-3.

(1) サルタナティー圖書館のこの寫本が，バーブルの著した5種類の作品を含む『バーブル著作集』とでも名付けるべき寫本であることは，アーターバーイの寫本目錄によって既に學界に知られていた。しかし，この寫本に含まれる5種類の作品のうち，從來その作品名が明確にされていたのは『バーブル・ナーマ』1編のみであった[74]。筆者は殘る他の4作品について檢討した結果，それらが『ムバイイン』，『アルーズ・リサーラス』，『ワーリディーヤ・リサーラス』，それに『504のリズム』とでも名付けるべき論文であることを確認した。なお，バーブルの詩集，すなわち『ディーワーン』はこの寫本には含まれていない。從って，この寫本を *Kullīyāt-Bāburī* すなわち『バーブル全集』と呼ぶのは適切でない[75]。

(2) 『ムバイイン』については，從來，學界にはベルリン寫本など比較的少數の寫本しか知られていなかった。ここに，本寫本の存在を確認したことになる。この寫本には大きなページの脱落があるが，現存する部分は，『ムバイイン』の校訂テキストの作成作業に役立つであろう。

(3) 『アルーズ・リサーラス』については，從來，學界にはパリ寫本という唯一の寫本の存在しか知られていなかった。ここに，學界未知の，第2の寫本の存在を確認したことになる。途中までの不完全な寫本ではあるが，やはり校訂テキストの作成に役立つであろう。

(4) 『504のリズム』とでも名付けるべき詩の韻律學關係の著作は，從來，『バーブル・ナーマ』に見えるバーブルの記述から，バーブルがこの種の論文を著した事實のみは知られていた。しかしその論文はいつしか散逸し，今日ではもはや見ることができないものと考えられていた。しかし今回，筆者はこの論文を『バーブル著作集』の中に發見し，この事實を本稿によって初めて學界に報告した。

(5) 『バーブル著作集』の最も大きな部分を占める『バーブル・ナーマ』

---

(74) トガンとアーターバーイが共にこの寫本に『バーブル・ナーマ』が含まれている事を記している。なお，前述のごとく，ユジェルは『ムバイイン』と『アルーズ・リサーラス』が含まれることをアーターバーイの記述から正しく推測していた。

(75) トガンは誤って，『ディーワーン』が含まれると記している。そのため，同じトルコの研究者であるユジェルも同様に考え，この寫本をバーブルの『全集』ではないかと考えている。『全集』ではなく『著作集』である。

は，バーブルの沒後，1589年から1613年までの閒に，インドで作られた寫本である。ロシアのスルターノフが繰り返し述べたようなバーブル生存中に作られた貴重この上ない寫本ではない。分量的には，從來知られていた『バーブル・ナーマ』の一部のみしか含まぬきわめて不完全な寫本である。例えば，カーブル章については，「925年の出來事」の一部分を含むのみである。勿論，『バーブル・ナーマ』の從來から知られた缺落部も，全く含んでいない。ただし，質的には良質な寫本で，先に出版した『バーブル・ナーマ』校訂本の補訂作業には利用できる。

(6) 『ワーリディーヤ・リサーラス』については，從來，4つの寫本が知られており，既に2種類の校訂テキストも出版されている。それ故，『バーブル著作集』の『ワーリディーヤ・リサーラス』の部分の價値はさほど大きいとは云えない。しかしここに，學界未知のほぼ完全な第5の寫本の存在を報告したことになる。

(7) 『バーブル著作集』の作成年代および作成地は，アーターバーイの目錄に記され，スルターノフらを誤らせた935年（1528—29年）ではなく，1589年から1613年にかけてのインドである。935年という年は，『バーブル著作集』全體の完成年代ではなく，『バーブル著作集』末尾に含まれる『ワーリディーヤ・リサーラス』の完成年代である。

(8) 『バーブル著作集』は，製本の際に生じたかと思われるかなり重大な亂丁や多くのページの落丁を含む。それにも關わらず，現在まで殘されている部分は，寫本の作成年代が比較的早いこともあって，『504のリズム』を含むなど，極めて貴重である。この寫本が，今後バーブルの研究者によって必ず參照されるべき價値を持つ優れた寫本であることは明白である。

その意味から，寫本全體のファクスィミールの早急な出版が望まれる。

activities especially considering the fact that his renown at court reached its peak at that time.

THE COLLECTED WORKS OF BĀBUR PRESERVED AT THE SALTANATĪ LIBRARY IN TEHRAN

MANO Eiji

This is a preliminary report on an important manuscript preserved at the Saltanatī Library in Tehran. The author has examined a photocopy of the manuscript bestowed by the Library in January 1998. The report seeks to supplement and rectify the brief reports written by Z. V. Togan and B. Ātābāy beforehand.

1. The manuscript consists of Bābur's five works. They are *Mubayyin*, *'Arūḍ risālası*, *Bābur-nāma*, *Vālidīya risālası* and a prosodical work which might be called *Five hundred and four rhythms*. Contrary to Togan's early report, the manuscript does not contain *Dīvān* and hence is not the *Kullīyāt* (complete works) *of Bābur*. The author proposes to call it the *Collected Works of Bābur*.
2. Despite the fact that the *Mubayyin* has lost many folios, it is still useful for making a revised edition which is not yet available.
3. The *'Arūḍ risālası* is incomplete and contains only around three-fifths of the original text. Nevertheless, it is the second manuscript ever known and thus useful for making a critical edition.
4. The *Five hundred and four rhythms* is a prosodical work. Bābur wrote in the *Bābur-nāma* that he composed such a work. However, it has been believed that the work had been lost. Therefore, the author reports the discovery of this almost complete Persian text here. Bābur scans (*taqṭī*) his own *bayt* (i. e. a line) in 498 ways in this work. The manuscript seems to have lost the remaining six ways.
5. The *Bābur-nāma* is severely incomplete. For example, its chapter on Kabul contains merely the events of the year of 925. However, it is of high quality and can be used to supplement the critical edition of the *Bābur-nāma* published by the author in 1995 to a small extent.

6. Although the *Vālidīya risālası* is almost complete, it is not so valuable since two critical editions of this work have already been available.

7. The manuscript was created in India between 1589 and 1613. The Catalogue of the Library written by B. Ātābāy dates the manuscript 935 (i. e. 1528—1529), but is found to be wrong. The year of 935 is actually the completion date of the *Vālidīya risālası* placed at the end of the manuscript.

8. The manuscript has some irregular and missing pages that seem to have occurred when it was bound. This defect notwithstanding, the manuscript is of great value as it was created in the early times. Thus, publication of its facsimile text is desirable.